

# 研究通信

16. 2. 3

1957年5月

村務研究会事務局

大阪市淀川区  
大阪市大倉町  
研究室内

## 本年度大会と課題決定

一、報告課題「自由課題」(農家の兼業化・その他)

二、シムボジウム「戦後十年農村の変貌」

かねて決定を迫られて居りました本年度大会のもち方について、最後の事務局として右のように課題等を決定いたしました。また、秋の大会は他学会と切離して単独で開催することとし、報告討論のみつちりやるために一泊二日にまたがり、一日を報告及びこれについての討論、翌日をシムボジウムに充てる予定です。この点は開催時期と場所等の都合もあるので臨時的とは申せませんが、過去の大会について十分な論議がつかないままに終つてしまふという傾向も指摘されているので、研究会の栄をあげるためと一度はこういつた大会の持ち方も必要ではないかと考へたわけです。

報告課題を「自由課題」とした理由は、前号のアンケートに示される通り会員層の多様な研究関心にかんがみ、今まで報告する成果や意向を持ちながら課題に制約せられて発表の機会に恵まれなかつた方々に出てもらうと、が主なものです。昨年の大会で具体的に提出された「兼業農家」や「近郊村」の問題、特に前者に関連して「農家の兼業化」としくわ「兼業化とその影響」といつた課題一本でやることも考へてみましたが、事務局の理由からこの問題をも含めて「自由課題」とした次第です。しかし兼業の問題は有賀さんの手紙にも指摘してある様に、別荘の日本農村を抱える場合重要な視角

の一つであり、これをめぐる生産や消費(生活様式)、家及び村の構造、農民の意識やパースナリテイ、労働の結び付きといった面で多角的に追求するべき好箇の課題であります。これに関しては強固から農業経済や農民層村に関連して、主として経済学の方面から研究が累積せられておりますが、社会構造や農民的性格を規定する兼業の意識についてはまだ本格的な検討が加えられて居ない様に思われます。大会の報告や討論においてこの問題が取りあげられ、今後の研究への拠点が設定されることを期待します。

シムボジウム「戦後十年農村の変貌」は報告討論以外に本年度の大会で持とうとする論議です。最初は事務局案として、「農(山、漁、村の近代過程」といつたものを報告課題として考へて居りましたが、その後各方面の意向を参照した末、これをシムボジウムの方向とし、時期的に戦後を中心にして変化の様相を取り上げることになりました。これでも尚ほく然として居るしました、村務共同体の関連をもっと深く検討したいという意見もありますが、司会者並びに問題提起者の方々にさうゆう含みで論議を用意してもらい、後は会員の無難な意見にまつことに致し度いと思ひます。要は大会への参加者が隔なく意見を交換し、何か持つて帰れるような題目としてこれを選んだまでであつて、題名にとられずにだんの研究成果を討論の場に出かして頂きたいと思ひます。

右の次で本年度は例年の様に特に課題委員を設けませんが、その代りに右の課題についての解説や見解をできるだけ「通信」に掲載するつもりなので、積極的に原稿を事務局までお寄せ下さい。尚本年の大会期日及び開催地は七月末までに決定する予定です。例年報告者の依頼等に手間取るようなので、報告希望者は八月末日迄に、所沢氏名・題名・報告要旨を事務局宛御連絡願ひます。

最後に課題決定に至る経過について一言しておきます。三月中旬事務局(中島)より上京の機会に福良・中野・松原の三会員と話し合ひ、その結果をもつて四月上旬在阪会員甲田・山本・中島の三人で協議の結果、ほぼ右の成案を得ました。これと前後して船京中の野多野会員よりも原案に賛成のお便りがあり、や、後れて有賀・竹

内両会員よりも後記のような意向が示されました。北海道・九州等からは特別の意向もつかげなかつたので、結局東京・大阪での話し合いをもとにして決定した次第です。なお本年課題の参考までに、有賀・竹内両氏の御便りの一部を拜借させて頂きます。

(事務局 中島 昭)

### 「兼業化」の提案

(東京) 有賀 専左衛門

課題についての週日の話し合いのことも聞きしましたが、「小生は「農村の兼業化」はいかがかと申上げます。兼業農家をそれと申上げました。それを一寸かえて右の如く申上げます。農家という概念も目下大いに変化しつつあります。農家でも兼業が農家だとは申しにくくなつて来たり、農家の中に他の職業を兼業するものが多く生じて、農家として兼業するといふ許りでなく、成員が職業的に分化して来ている。そこで今まで家と家との協同関係が沢山あつた所え、個人的な関係もいろいろとまじり合つて都市の周辺の家ではひどく形態もちがつてくるようです。これからこれらの変化をとりえて大ざっぱに「兼業化」という意味で選定してみたらどんなものでしょう。(後略) (四月六日附録)

### 通信

(仙吉) 竹内 利英

みちのくもやつと書いてきました。まだ花には間がありそうです。目下大分休業中の人集めにも連絡にも不便なので、御返信のこ

と氣にかゝりながらそのまゝになつていて申訳ありませんでした。それで先日中村吉治さんと話し合つたまま、二十日すぎなら一寸書かえまつてもらつて意見をきゝたく思つて居りますが、二人の考えでは、  
1、本年は大会発表はむしろ自由にしてやるか、共同討議は共通テーマを何か設定して、みづちりやり、来年の共同課題にもつて行くか、  
2、題目は概念的でもよい、また少々広くともよい。そして来年はその実証的研究を協同にするということにする。うまく行けば共同の調査研究ということも望ましい。  
こんなのも一つの行き方ではないかと思つています。(後略) (四月十一日附録)

### 偶感

(豊橋) 川越 淳二

N兄 御無沙汰にすぎました。先日はお手紙ありがとうございました。早速御返事をとおもひながら雑草におわれてついつい遅れて申訳ありません。御丁度ください。

さて今年の大会のありかたとして期日を二日間とし、さきに決定した課題のほか、自由課題・村落共同体の問題にふれてと討論・戦後十年の農村の変化というテーマで、経済、社会制度、意識、パースナリティなどの各側面からシンポジウムをころみるという事務局の提案にはまづたく賛成です。おろかえしその旨を御連絡しようとおもつたのですが、ベツに御依頼をうけた原稿と一緒にとおもつて居るうちにとうとう約京の期日をおくらせてしまつたわけです。先日岡々電車の

なかで受知学芸大学の後藤和夫氏にお会いしましたのでこの件をお話して御意向をうかがつてみました。三〇分位の落着かない車中の立話であつたのである。同氏の御意見を誤解したところもあるかとおもいますが、二人の意見は大要つぎの点で一致したようでした。  
(1) 最近の大会の内容や雰囲気は仙合大会のそれにくらべてかなり形式的になりつゝある。村研の大会で大切なことは、なごやかな難もがおもつたことを自由に発言して、しかもそれが直接研究に役だつような意見であることだとおもう。そのためはやはり会期は二日にしてフォーイマルにまたはインフォーイマルに討論できる時間的余裕がほしい。そこで会場が地方であるばあには、大都市のばあいでもできれば一宿舎を一ヶ所にして、夕食後くつろいだ気分である程度の統制のもとに心ゆくまで討論してみたい。

(2) これはとくに社会学の關係者につよく要望したいが、主題にかんする問題意識について、ほかの分野の研究者と話しあつてみる必要がある。問題意識の完全な統一は期待されないにしても、潜在的なものが顕在化され整理されるだけでもおおきな収穫といえよう。  
(3) 以上の点から、個々の報告者の研究報告は具体的な内容あるいは調査結果、それはもちろん重要であるが、よりも問題意識、使用された手法、分析の方法などについて詳細な報告であることを期待したい。  
等々であつたように記憶しております。もちろんご報告はある意味でわたくしたちがざられた一部のもの、思想といつてはなん

ですが一であるかも知れませんが、それでこの  
ような考えが問題にされるべきかどうかとい  
うことだけでも「研究通信」あるいは大会の  
席上でとりあげて頂ければ幸いですとおもつて  
おります。

それから、わたくし自身の研究の近況をの  
べようということですが、この方は一昨年金  
沢で開かれた関西社会学会大会の席上で報告  
させて頂いて以来、農民の価値観あるいは価  
値体系とつづつたものについて、おもに「  
項をやくくツクク」の所説を基礎にささや  
かな研究をつづけてきておりますが、どうや  
ら今頃になつてその楽観をあまりかにする方  
法だけについてある程度お話しできる段階に  
到達したようにおもいます。けれども、実は  
分析の方法という重要な部分がはつきりして  
おりません。いままでも資料は経験的に蒐集は  
してきたものの、その分析や解釈のために「  
農民はこうだ」という既成概念に頼りすぎて  
いたような気がします。そして「何故にそう  
なのか」ということについても。

そこで最近「農民はこうだ」ということ  
を実証的に都市居住者との比較して考えよう  
としていきます。そして「何故にそうか」とい  
う、因子を社会的・個人的に對する1なもの  
にもとめようと努力しているわけです。けれ  
ども、この社会的因子も確ひとつではないで  
しょうし、その発見はまだまだ先のようにす  
ので、いままのところお話しするほどのものが  
ありません。この点について、学兄はじめ会  
員諸氏から御教示頂けたらとおもつていま  
中村先生の「村落調査の研究」をはじめと

して、村落研究の成果が総説として公刊され  
る最近のことです。「研究通信」にも書評の  
欄でもつづつて腹藏ない意見をのべてみたら  
どうでしょうか。経済学、歴史学、社会学、  
等々の各分野の研究がそれぞれの角度から  
書評をこころみることは著者にとつても会員  
一同にとつても有意義だとおもいますがいか  
がでしょうか。

約案の期日から大分遅れてしかも粗末な通  
信(文)田沢(秋津津津大)御指導を蒙りま  
す。ごめんなさい。又、お詫言えたい。

### 會員動向(其の二)

昭和三十一年末に行つたアンケートにより、  
前号記載以後に到着した分につき要点を四録  
する。記述の順序は、氏名・所属機関の次に  
①現在の研究テーマ、②昭三一年度中に行つた調査  
のテーマと調査地、③昭三一年度中の執筆著  
書論文、④本年度の研究テーマ、⑤来年度の  
調査予定テーマ及び調査地、⑥その他。記入  
のないものはその部分を省略してあります。

#### (事務局)

- ◎飯塚博久(群馬県立小泉農高) (1)農民の  
パーソナリティ形式に關与する社会・経済的  
諸要因 (2)「住生活における人間關係の変容」  
(栃木県佐野市) (3)「同上」(オ一報) (村  
誌三三・一〇) (4)同上の繼續 (5)「経営階層  
別にみた農民意識の変容」(未定) (6)農民を  
一國の人間として捉え、科学的に分析して行  
きたい。同様の友の指導を乞う。
- ◎岡田謙(東京教育大) (1)基礎集團の比較  
研究 (2)「灌漑化村落の調査」(共同調査) (

岡山県高松町新油 (Race Relations  
in Formosa under Tie Tadesse  
(Race Relations in World  
Perspectives, edited by A.W  
Lind, Univ. of Hawaii Press)

- (4)三一年度の繼續 (5)同上。
- ◎金子功(長野県立高見高) (1)農村の生活  
水準 (2)安定農家の研究 (長野県諏訪郡茅野町  
(3)「安定農家に於いて」(農村調査の報告) (1)  
松岡隆雄(藤玉三三・三三) (4)「同上」 (5)農業経  
営調査 (長野県茅野町、同高見町) (6)研究論  
信を一層充実したものにして頂きたい。
- ◎高倉又二(官師大) (1)南九州農村の社会  
構造 (2)幕末期日向農村階層構造分析 (延岡藩  
出北村) (現延岡市出北区) (3)「同上」 (官師  
大学記要三二・三三) (4)幕末期日向農村構  
造の分析 (5)同上 (日向国延岡藩官師郡一円農  
村) (現官師市周辺農村)。
- ◎秀村選三(九州大) (1)農村における階層  
關係の歴史的研究 (2)幕末期治期における村方  
商人の手代と小作差配人 (九大経済学研究所二  
二の一) (3)「下人に關する資料覚書」(九大経済  
史論集2) (4)近世大名領國時代の夫役の情形  
態」(九大九州文化史研記要2) (4)1と同一  
(5)2及び「村落の発展過程と労働組織の変化  
(福岡県浮羽郡浮羽町山北)。
- ◎堀口貞幸(東京都立化学工高) (1)村と村  
形成の發展團の歴史研究 (2)1と同一 (3)長野県  
上伊那地方 (4)1と同一 (5)2と同一
- ◎牧野由朗(愛知大) (1)意識態度調査にお  
ける技術的検討 (2)同上 (愛知県上津具村、同

豊橋市、同海美郡渡瀬(5)「経緯調査における尺度法とその限界」(愛知大文学論叢刊)、社会意識測定のための尺度構成」(同上13)門徒村の研究」主として宗教意識を中心に(愛知大綜合郷土研紀要3)(4)1と同じ(5)1と同じ(愛知東豊橋市)。

◎森喜兵衛(岩手大図書館)(1)近世無尽金融の研究」農村金融(2)同上(東京及び東北各地)(5)「近世農村年季奉行人の研究」(岩手大学芸学部年報三一・一一)、「二戸郡瀧岡町建設計画調査」(福岡町)、「近世村落無尽金融の変質」(農業経済研究)29巻1号(4)1と同じ(5)2と同じ(同上)。

◎森村勝(滋賀省大臣官房調査課)(1)経済社会学、アジヤ経済(2)「東南アジヤ経済動向の分析」(経済分析20)、「工業雇用の動向と産業政策」(同上21)、「鉱山の歴史と民俗」(鉱山文化、56・11より)二年間送致予定(4)1と同じ、特に分業論、技術論を中心として(6)方法論をしつかりやり、概念規定を明確化する。歴史的・体制的視座の意識。従来の資本主義分析の成果を利用すること。

◎八木佐市(茨城大)(1)村落の伝統性、変動性(2)同上(栃木県河内郡上河内村上田)(4)1のまとめ(4)同上(香川県綾歌郡久方玉村)。

◎山岡栄市(島根大)(1)漁村共同体の発展に伴う村落構造及農民意識の変遷過程(鳥根県真川郡斐川村)(3)「大根島」生誕と課題」(関書院三一・一二)(4)2と同じ(5)2と同じ(徳島、北九州浜村及斐川村)(6)事務局長室としての一農山村の近代化過程」で結核です。

「一日会期を延長し、「村落共同体の構造と祈」を中心として、基本概念についての討論を行いたい。以上

### 共同体研究と

### 分業論

(甲府)山室周平

共同体の解明のために分業の研究が有力な手掛りの一つとなるのではないかと考えている。大塚久雄「共同体の基礎理論」においては分業がライトモチーフの一つとされているが(二五―六頁等参照)、あの本の中ではまだ分業の問題が充分展開されているとはいえないように思う。

小やかな試験ではあったが、われわれが農村の家族の機能を職業分業表を使って測定しようと思いついたのも、実は分業についての含みもあつたことだったのである(社会学野郎、才二二号の拙稿参照)。しかしこの場合も家族の問題に終始して、夫々の機能(職業)が夫々の家族によつて充足されていない場合、同によつて充足されているか、同族間によつてか、村落共同体によつてか、乃至は又専門的職業によつてか、といった点を一々について追求するところまでは及び得なかつたのである。

もともと分業論はツムメル、デュルケム以来社会学の伝統的な重要問題の一つであつたので、われわれにとり、やりかたによつては条件に恵まれているともいえるだろう。

(一五二)

いづれにもせよ、共同体を繞る競争関係の(職業)の配分関係の吟味、その歴史的な在り方の究明は、今後われわれにとつても、われわれなりに採り上げ、そうして寄与し得る一課題ではないかと考えている。ただ、そう考へてはいるものの思うに任せぬ今日この頃であるが、関心を持たれる人々によつて何等かの形式でこの方面の研究が推進されていくことを望みたい。

### 年報(第三集)の書評二つ

農村への新しい目

「土に育つ逞しい新風」

「サンデー毎日」32・2・3附録第70頁

突を結んだ労作、對摩的で保守的だと言にいわれた農村にも、新しい風がこころよくやく吹きはじめた。しかも農村でのめざめは、農村のなかからまず動きだし、農村をじつさいに自分の目ながめ歩く人々によつて捕えられかけてきた。

村落社会研究会編「村落共同体の構造分析」(四二〇円・時潮社刊)は、みごとな労作である。福武直らの農村実態調査がようやく突をむすび、農村を捕える新しい眼をひらいたと評し得る。生きていく農村は、ただこれを経済学的に、政治的な面からだけではつかむこと

かできない。水田への水灌、山林の利用、ゆる水組田組から農協におよぶ、さまざまの共同体がしつかりと小根をはりめぐらしている。そして、その根の張り方が東進型と西進型でちがひ、山場と平場とでは異なるのだ。神外国での村落共同体の研究状況も併せられかなり専門的な叙述ではあるが、注目してよい著作だ。

日本の村についての討論

『調査新聞』昭和31・11・24

（二十五号五城巻）

村ならびに家についても典型的な集積を呈示されている日本の学者達の研究が総合的にまとめられている点で、この論文集は画期的意味をもっている。この二・三年來日本における村落共同体及びそれら家との関係についての究明に研究者の関心が集中されているので、この論文集に収められた諸家の業績は、さらに全体の業績を進めかつ深める上に大きな貢献をすることは疑いがない。

（後 略）

告知板

◎その後の会費納入者

（二・二二―四・二五）

◎昭和三十一年度分

緒山貴太郎 佐部達利 堀口真平

長野健四郎 貴志正造 秀村通三

鈴木榮太郎 斎藤長市 池上広正

森村 勝 森澤兵衛

◎昭和三十一年度分

山宮扇平 山田俊道 山岡榮市

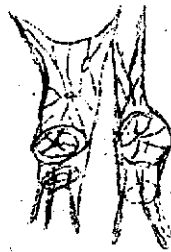
有賀孝左衛門

◎会員の研究状況（アンケート）はその後到着した分づゝ掲載いたしますが、未だ通知ない方は事務局までおよせ下さい。またその後住所変更の通知が大分集まっておりますが、近く新名簿を修正いたしますので、一括改訂します。又、住所等変更の節は御連絡下さい。

◎本号は年報の反省をとりあげる予定でしたが、頒布が思う様に袋まらぬため大会の課題報告が主となりました。大阪・京都はまだ会

員も少く、手許で原稿を集めて通信をつくる  
ところまで行かないので、東京はじめ各地よ  
りの投稿に期待するところ大きく、後援方々  
重ねてお願いしておきます。

（事務局）



村落社会研究会々則

A 名称 本会を村落社会研究会とする。

B 趣旨 本会は村落社会の研究について専門各分野の進歩を期にし、その研究の発展を期する。

C 事業

1 研究会

a 毎年共同の課題を定め、年一題課題研究に関する共同討論会を開く。

b 毎年の討論大会の慶翌年度の課題を決定し、各自で調査研究又は適宜共同調査を行い、次年度の共同討論会において発表し、論議する。

c 共同討論大会以外に各地において調査し研究会を頻りに開き、又各地会員の連絡を計り、研究活動をさかんにする。

2 出版

本会は要聞誌として年報を出版する。これは主として討論会の成果を発表するが、その他内外の研究業績の発表紹介批評等をもせる。又研究通信も発行して研究の進歩に資する。

3 共同調査

会員相互の共同調査をも行うと共に海外の学者との連絡を密にし、併せて共同調査をも企てた

D 会員及び会務

1 会員は村落社会研究に関心をもち、共同研究活動を希望する諸科学分野の研究者を以てする。

2 会費は三百円（入会金不要）

3 本会に事務局をおく、（当分大阪市立大学社会学研究室におく。）

(附) 1 毎年共同研究課題を定めて、共同討論の大会を開催する。

2 事務局は本年は大阪市立大学社会学研究室におき、研究通信を発行する。事務局は毎年会員の属する各大学研究室の輪番当番とする。

3 事務局に事務委員若干名を置く。

4 通信連絡委員若干名を置き、「研究通信」を編集発行する。

5 年々の課題に於て課題委員若干名を置く。

6 課題委員を含めて若干名の年報委員を置き、年報の編集に当る。